

英語・数学・理科〔生物基礎・化学基礎〕・国語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子の出題科目、ページ等は、下表のとおりです。監督者の指示に従って確認しなさい。

出題科目	大問題番号	ページ	対象受験者
英語	第1問～第4問	1～12	2科目受験 薬学部(専願制)の 受験生は1科目受験
数学	I～III	13～18	
生物基礎	I～III	21～34	
化学基礎	I～III	35～42	
国語	第一問 第二問	70～45 (裏表紙の次のページから)	

- ・人間社会学群の受験生は英語、国語、数学から2教科2科目選択し解答しなさい。
 - ・医療保健学部の受験生は英語、国語、数学、生物基礎または化学基礎から2教科2科目選択し解答しなさい。
 - ・薬学部の受験生は化学基礎または生物基礎のいずれかを必ず解答し、英語、国語、数学から1科目選択し解答しなさい。
 - ・薬学部(専願制)の受験生は化学基礎の1科目を解答しなさい。
 - ・看護学部の受験生は英語を必ず解答し、国語、数学、生物基礎、化学基礎から1科目選択し解答しなさい。
 - ・国語の問題は裏表紙「数学 マークシート記入上の注意」の次ページから始まるので注意すること。
3. 解答用紙はマークシート2枚です。
 4. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。
 5. マークは、解答用紙(マークシート)に記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。ただし、数学のマークは、問題冊子裏表紙の「数学 マークシート記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
 6. 受験番号及び氏名は、解答用紙(マークシート)の所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
 7. 監督者の指示があつてから、解答用紙(マークシート)の左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。(数学については数学専用の解答用紙(マークシート)を使用すること。)
 8. 問題冊子の中にある余白ページ(P.19, P.20, P.43, P.44)を下書き用紙として利用してもかまわない。
 9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国語

(45分) 100点 (解答番号

1

5

30

)

第一問

次の文章は小野寺史宜『ひと』の一節で、南砂町に住むフリーターの聖輔(僕)は、砂町銀座商店街にある惣菜屋「おかずの田野倉」で店主の督次さんたちと一緒に働いている。次の場面を読んで、後の問いに答えなさい。(45点)

雨が降っても、人は仕事に行かなければならない。だから通勤電車が空いたりはしない。 [1] 雨が降って、今日は買物はいいか、となることはある。だから商店街の人通りは少なくなる。

アーケードがある商店街ならちがうのだと思う。ないところは、影響が出る。店に出入りするたびにカサを閉じたり開いたりする。それは面倒だ。

降りの程度にもよる。本降りになれば、さすがに [3] とする。食べ歩きを雨天決行する人も、そうはいない。店は暇になる。揚げるコロッケの数も減る。そこは督次さんが自身の判断で調整する。

今日がまさにその日だ。梅雨入り後初の、本格的な雨。通りは [3] 。揚げは調整。

こんな日に休みだなんて映樹さんはツイてるな、と思う。いや、映樹さんなら、むしろツイてないと思うのか。店が暇なときに休んじやもつたないだろ、くらいのことは言いそうな気がする。

僕は逆だ。暇なほうがツライ。お客さんが少ない日の店番は退屈だ。時間が経つのが遅い。休憩にもありがたみがない。こうして丸イスに座っていても、休憩感がない。

いつも忙しくしている督次さんまでもがこの更衣室兼休憩室にやってきて、隣の丸イスに座る。

「今日はもうダメだな」

「はこ」

「これから上がってくれりゃいいけど、一日みたいだしな」

「明日も午前中は雨ですよ。スマホの天気予報で見ました。午後からはくもり、降水確率は四十パーセント、だそうです」

「四十は厳しいな。結局ダラダラ降るんじゃないかねえか？ みんなそう思うから、買物には出てこないだろ」

「そうなんですかね」

「まあ、今日出なかった人は来てくれるか」

「だといいですけど」

督次さんは両腿わたいももに両ひじを載せ、顔の前で両手の指を組み合わせる。油の熱に耐えられるよう皮がアツ(5)くなり、結果太くもなつた指だ。実際、督次さんは高温の油がはねても動じない。僕なんかは、はねるたびに、うっ！ だの、熱っ！ だのと声を出してしまうが。

「なあ、聖輔」

「はい？」

「お前、調理師免許をとってこうなりたいとかってのは、あるのか？ 和食の料理人になりたいとか、洋食の料理人になりたいとか。レストランで働きたいとか、ホテルの厨房ちやうぼうで働きたいとか」

「ああ」少し考えて、言う。「今はまだ、ないです」

「決めとくこともねえか。そのうち自然と決まるだろうし」

「はい」

「親父おやじさんは、和食だったか」

「和といえは和なんですかね。鶏とりがメインの居酒屋をやったので」

「お前、惣菜屋をやるのはいやか？」

「え？」

「惣菜屋だよ」

「こういうお店、ですか？」

「どうか、この店、だな。おかずの田野倉」

督次さんは組み合わせた指を解く。マッサージをするように、右手の親指で左手のひらをもむ。

「おれと詩子に子どもはいないだろ？」

「はい」

「初めからわかってたんだよ。できないって」

知っている。一美さんから聞いた。でもそうは言えないので、黙っている。

「先のことを考えて店を始めたわけじゃない。ここまで続けられるとも思わなかった。でも運よく続けられた。で、そろそろこの問題に向き合わなきゃいけないようになった。要するに、後継ぎがないんだ」

「ああ」

「といって、継がせるほどの店でもないけどな」

「いえ、そんな」

「ただ、詩子と二人でずっとやってきた。もうおれも六十八だ。これからは何があってもおかしくない」

確かにおかしくない。まったくおかしくない。たとえ四十代でも、何かが起こるときは起こるのだ。二十代だってわからない。

例えば猫は、飛び出す相手を選ばない。^{注4}

そんなことを思いながらも、言う。

「まだまだじゃないですか」

「まだまだじゃない。聖輔ならおれ以上に知ってるだろ、人間にはいつ何があるかわからないって。おれもな、聖輔のことを知って、考えるようになったよ。おれはたまたまこの歳まで生きてこられたんだなって」

「でもたいていの人は、そうですし」

「悪いな。いやなことを思いださせて」

「いえ」

「こんなちっぽけな店でも、やっぱり愛着はあるんだよ。できることなら残したい。おれと詩子がやめたあとも、ここでコロツケが売られるのを見たい。そのコロツケを買いに來たい。だからやめるときは、店を閉めるんじゃないかと、誰かにユズ⁽⁶⁾りたいんだ。誰かっつのは、この店を知ってる誰かだな。名前は変えてもらってかまわない。田野倉じゃないのにおかずの田野倉としてやる必要はない」督次さんは真横から僕を見て、こう続ける。「聖輔なら、ちゃんとやってくれると思うんだ」

聖輔なら。身寄りのない僕なら、という意味だろう。たぶん、映樹さんより僕、という意味でもある。

「でも、僕はまだ」

「働いて一年も経たないのにそんなこと言われたって困るよな。それはわかってる。ただ、おれも、早いうちに準備はしとかなきゃいけないんだ。別に深く考えなくていい。おれにそんな気持ちがあることだけ、知っといてくれ」

⁽⁷⁾何も言えない。どう反応すればいいかわからない。

「聖輔が入ったのはいつだ。去年の九月か？」

「十月、ですね」

「てことは、えーと、八カ月か」

「はい」

「短いと思うかもしれないけどな、充分だよ。半年も一緒に働いてれば、ある程度のことにはわかる。聖輔ならいざれ店をまかせられるとおれは思ってる。あるときメンチを負けといてよかったとも思ってるよ。八カ月とはいえ、お前は一度も店を休んでない。遅⁽⁸⁾コクもしてない」

「早退はしましたよ。カゼで」

「あれはおれが帰らせたんだ。おれが言わなかったら、お前は帰らなかつたら」

そうかもしれない。⁽⁹⁾拳句こぶしに倒れたりして、かえって迷惑をかけていたかもしれない。

「先のことだからって、いい加減な気持ちで言ってるわけじゃない。それはわかってくれよな」

「はい」

わかる。そんな大事なことを、いい加減な気持ちで言えるわけがない。

とまどいはする。大いにする。でも、単純にうれしい。店がどうこうでなく、督次さんがそんなふうと言ってくれたことが。身寄りのない僕なら、つまりあとがない僕ならちゃんとやる。必死にやる。督次さんはそう考えてくれたのだと思う。

普通なら、映樹さんだろう。督次さんから見れば、友人の息子。僕よりは仕事歴も長い。手際もいい。経営面はともかくとして、厨房で督次さんがやることの七割八割はすでにこなせる。

一美さんもそれは同じかもしれない。が、立場はちがう。男がどう女がどう、ではない。まず一美さん自身に店を持つ気がないはずだ。

映樹さんはどうなのか。店を持つ気があるのか。店主になる気があるのか。

ないことはないだろう。おれが店をやるならおにぎりも扱おう、なんて言うこともあるから。米をタ⁽¹⁰⁾く設備を導入しても、こなら充分もうけを出せるだろ、とかなり (11) なことも言う。

督次さんが同じ話を映樹さんにもしたとは思えない。二人をてんびん⁽¹²⁾にかけて競わせる。督次さんはそんなことをする人ではない。それこそ八カ月一緒に働いているのだから、そのくらいのはわかる。⁽¹³⁾督次さんは、あえて今日言ったのだ。暇な雨の日だから、ではなく、映樹さんが休みの日だから。

「これじゃ休憩になんねえよな」と言つて、督次さんは丸イスから立ち上がる。

僕も立ち上がるようにするが、制される。

「いい。お前はもうちよつと休め」

「でも、そろそろ時間ですし」

「忙しいときはちゃんと休ませてやれないからな、こんなときぐらいは休め。給料から引いたりはしないよ。というか、ほんとは、きちんと休めてない分を上乗せしなきゃいけないんだよな」

督次さんが更衣室兼休憩室から出ていく。階段を下りる音が聞こえてくる。

僕は浮かせてた腰をストンと落とす。丸イスの脚がギギッと鳴る。

何だろう。⁽¹⁴⁾ちよつと身が震える。親切な人は、いる。鳥取にも、銀座にも。新習志野にも、^(注5)南砂町にも。

(小野寺史宜『ひと』祥伝社による)

(注1) 映樹さん——「おかずの田野倉」の従業員であり、督次さんの友人の息子。

(注2) 詩子——督次さんの妻。

(注3) 一美さん——「おかずの田野倉」の従業員。

(注4) 例えば猫は、飛び出す相手を選ばない——聖輔の父親は、車の運転中に、急に飛び出してきた猫を避けようとして、交通事故で四十七歳にして亡くなってしまっている。

(注5) 鳥取にも、銀座にも。新習志野にも——いずれも、聖輔や聖輔の家族がかつてお世話になった人がいた場所。

問1 空欄番号

(1)

(3)

(11)

に入る語句として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ

一つずつ選びマークしなさい。

1

3

⑤ ④ ③ ② ①

⑤ おまけに ④ そこで ③ でも ② なぜなら ① 要するに

1 (1)

⑤ ④ ③ ② ①

⑤ 混迷 ④ 辟易へきえき ③ 悶々もんもん ② 閑散 ① 騒然

2 (3)

⑤ ④ ③ ② ①

⑤ 具体的 ④ 懐疑的 ③ 利己的 ② 感傷的 ① 婉曲えんきよく的

3 (11)

問2 傍線番号(2)・(5)・(6)・(8)・(10)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

4
8

(2) カサ

4

- ① 養サ|んが盛んな地域
- ② 称サ|んの声を浴びる
- ③ サ|ん劇を目にする
- ④ 企業のサ|ん下に入る
- ⑤ サ|ん性雨が降り注ぐ

(5) アツク

5

- ① 書類の条コ|ウに目を通す
- ② 重コ|ウな扉を取り付ける
- ③ 新しい随筆を起コ|ウする
- ④ コ|ウ湾に輸送船がとまる
- ⑤ 巨大な権力に抵コ|ウする

(6) ユズリ

6

- ① 相手にジ|ョウ歩する
- ② 気ジ|ョウにふるまう
- ③ ジ|ョウ軌を逸する
- ④ 施ジ|ョウを確認する
- ⑤ 液体をジ|ョウ留する

(8) 遅コク

7

- ① 見本とコ|ク似している
- ② コ|ク物を収穫する
- ③ 溪コ|クに沿って進む
- ④ コ|ク明な記述がある
- ⑤ 寸コ|クを争う事態だ

(10) タク

8

- ① 宴会の最後は雑ス|イを選ぶ
- ② 学校でス|イ奏楽を練習する
- ③ 自宅の和室で午ス|イを楽しむ
- ④ 彼は生ス|イの関西人ようだ
- ⑤ 大学で西洋文学に陶ス|イする

問3

傍線番号(4)「映樹さんなら、むしろツイてないと思うのか」とあるが、どうということか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

9

- ① 映樹さんは、店が暇なときにあえて精を出して働かなければ、それっきり客足が遠のいてしまうと考えるはずなので、「僕」の代わりに仕事ができないのを悔しがるかもしれないということ
- ② 映樹さんは、雨天にやる気が出ない「僕」とは違い、店が暇な日にこそ一生懸命に働き、店内での評価を高めるチャンスだと考えそうなので、自分の休みを運が悪いと捉えるかもしれないということ
- ③ 映樹さんは、仕事が忙しいときに休むほうが貴重だと考えるはずなので、お客さんの姿が見えない雨の日に限って「僕」と仕事に出なければならぬことを残念に思うかもしれないということ
- ④ 映樹さんは、お客さんの入りが期待できないような雨の日のほうが、暇な店内で楽にやり過ごせるので、「僕」と反対に、今日仕事に入っていないのはかえって損だと考えるかもしれないということ
- ⑤ 映樹さんは、お客さんが来ない日の店番は手持ち無沙汰になるため、「僕」と同じように、時間が経つ遅さに苦痛を覚えるはずなので、仕事に入っている僕を気の毒に思うかもしれないということ

問4

傍線番号(7)「何も言えない。どう反応すればいいかわからない」とあるが、この時の「僕」の気持ちを説明したものととして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

10

- ① 督次さんに店の今後について相談を持ちかけられ、自分が将来料理人になりたいかどうかはわからないものの、少なくとも惣菜屋の後を継ぎたいとは思っていないことを言い出せず、困惑している
- ② 督次さんに店の今後について相談を持ちかけられ、惣菜屋は他にもたくさんあるのに、あえて田野倉の店を継ぐことを遠回しに勧めようとする督次さんの考えに返す言葉がなく、途方にくれている
- ③ 督次さんに店の今後について相談を持ちかけられ、督次さんが自分に身寄りがないことを計算に入れた上で、店を押しつけようとしているのではないかという考えが拭えず、疑心暗鬼になっている
- ④ 督次さんに店の今後について相談を持ちかけられ、自分を後継者に考えてくれていることはうれしいが、自分よりも仕事歴が長いのに候補に挙がらなかった映樹さんに対し、申し訳なく感じている
- ⑤ 督次さんに店の今後について相談を持ちかけられ、督次さんの真剣な気持ちや店への愛着は十分感じ取れるが、自分が田野倉の店の後を継ぐという急な話に心の整理がつかず、戸惑っている

問5 傍線番号(9)・(12)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

11

12

(9) 拳句

11

- ① 予期しない事態
- ② わがままな考え方
- ③ 期待を裏切る行為
- ④ 最後に行き着いた結果
- ⑤ 起こるべくして起こる問題

(12) 天秤にかけて

12

- ① 平等に扱って
- ② 優劣を見比べて
- ③ 仲たがいさせて
- ④ 実利の面で評価して
- ⑤ うまくそそのかして

問6 傍線番号(13)「督次さんは、あえて今日言ったのだ」とあるが、ここからわかることとして、最も適切なものを、次の①～

⑤の中から一つ選びマークしなさい。

13

- ① 督次さんが、映樹さんが店主になるつもりがないのを、どことなく察していたこと
- ② 督次さんが、厨房の仕事を大方こなせる技量を見込んで「僕」を高く評価してくれたこと
- ③ 督次さんが、映樹さんが時折店の経営に口出しするのをよく思っていないことがあったこと
- ④ 督次さんが、「僕」が以前、店を早退して迷惑をかけたときのことを、とがめてはいないこと
- ⑤ 督次さんが、他の誰でもない、「僕」に自分の店をまかせたいと前々から考えていたこと

問7 傍線番号(14)「ちよつと身が震える」とあるが、この時の「僕」の気持ちを説明したものとして、最も適切なものを、次の

①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

14

- ① まだ一年も働いていない自分の給料のことを真剣に考えてくれる督次さんの心遣いに触れ、いい経営者に雇ってもらってよかったという喜びをかみしめている
- ② はじめは思いがけない話に気が気でなかったが、督次さんの考えをひとつお聞きしたこと、話に現実味があることを再認識してうれしさを隠し切れないでいる
- ③ 店についてのさまざまな思いが胸をよぎりながらも、自分の身の上を承知した上でいろいろと思いやってくれる督次さんの気持ちをしみじみと感じている
- ④ 督次さんの期待に何とか応えたいと考えつつも、自分がこれから経営者として成功しなければならぬという重圧にたえ切れず、気持ちが張りつめている
- ⑤ 督次さんの突然の提案に驚いていたが、督次さんがその場を離れて一人になったのを機に、自分が店を切り盛りしていく今後のことを真剣に考えようとしている

問8

本文の特徴の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

15

- ① 仕事を進める動作を細かく表現することで、店主の督次さんに比べてまだ不慣れな「僕」の仕事ぶりを伝えている
- ② 過去の場面を挿話として詳しく描写することで、その場には存在しない映樹さんの人がらを客観的に表現している
- ③ 人物の表情や目線の動きを強調することで、「僕」の考えを慎重に見極めようとする督次さんの様子を描いている
- ④ 主人公の頭の中での考えを直接描くことで、周囲の人々について考えをめぐらせる「僕」の気持ちを表現している
- ⑤ 短い会話文を中心に物語を構成することで、「僕」が督次さんの提案に結論を出すまでの過程を丁寧に描写している

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(55点)

「速度都市・TOKYO」と題された論考で伊藤俊治は、現在の東京は、上下水道やガス、電気、道路や水路などの伝統的な都市インフラではなく、メディアや情報のネットワークに支えられており、それらのネットワークの生み出す「新しい速度」が、都市という場所を「確固とした、物質的な、形のある統一体ではなく、拡散し流動し、⁽¹⁾遍在し、消えてはあらわれる振動する場そのもの」にして、「時間軸や空間軸を多彩に変え、加速度的な変容の時代をスリリングにドライブし、かつてない都市のカオスを生み出しつつある」のだと論じている。

⁽³⁾ その少し前、八〇年代の終わりにNHKで放送された『TOKYOスピード——21世紀へのデザイン実験都市』という番組でもやはり、さまざまな新しい建築意匠やデザインを⁽⁴⁾貪欲に取り込み、消費しながら変貌を続ける東京という都市のあり方と、コンピュータ・ネットワークに代表される新たな情報インフラを組み込むことで可能になる、都市内外の情報流通の高速化がもたらすであろう都市のゆくえを指すキーワードとして、「速度」という同じ言葉が用いられていた。

⁽⁵⁾ 、バブル景気^(注1)のなかで急速にその様相を変える都市と、登場しつつあった新たなメディア・テクノロジーに対する「驚き」を捉える言葉として、「速度」や「スピード」はうつつつけだつたと言うことができる。だが「速度」や「スピード」というこれらの言葉を私たちは、一九八〇年代から九〇年代の都市や東京という特定の状態を超えて、⁽⁶⁾東京という都市の過去と現在、そしておそらくは未来をも照らし出す概念として使用することもできる。実際、先にあげたテレビ番組『TOKYOスピード』は、「スピード」という言葉で放送当時の東京の急速な変貌と、そこに内在する情報の流通・消費の速さを捉えようとすると同時に、そのいわば「前史」として、明治維新以降つねにその様相を変転させつづけてきた近代都市東京についても言及していた。それは、その速度の大きさやヴェクトルは異なるとしても、ある意味では東京は明治維新以来つねに「速度」の場であったということ、現代の東京はそうした明治期以来の「速度都市化」が加速を続けてきた末に現れたものと見なせるかもしれないということだ。

⁽⁷⁾ 私たちは、一九〇八年(明治四十一年)に発表された夏目漱石の『三四郎』のなかで、主人公の小川三四

郎がはじめて上京した東京で、行き来する電車と乗り降りする人びとの量や、城下町江戸から近代都市東京へと変貌を遂げつつある東京の変化の激しさ、その空間的な広がりに対して感じた驚⁸⁾タンや、一九一七年（大正六年）に発表された田山花袋^{（注2）}の『東京の三十年』に描かれた、明治期から市区改正事業が完了する大正期はじめまでの東京の変貌の様に、「速度都市・TOKYO」や「TOKYOスピード」の、いわば原型を見ることもできるのである。

明治期の市街鉄道普及以前に隆盛をきわめた人力車にはじまって、市街電車、自動車、東京から全国各地に向けて延びていった諸幹線鉄道、海上航路、官営・私営の近郊電車、地下鉄、新幹線、高速道路、航空路線といったさまざまな交通メディアと、電信、電話、コンピュータ・ネットワークといった通信メディアを組み込んでいくことで、東京という都市は、ローカルには徒歩による移動を基本とし、遠隔地間ではやはり徒歩と帆船による航行を基本とする交通・通信体系に基づいていたそれ以前とは異なる関係の場合と、この一世紀の間に急速な変貌を遂げていった。

それは、単に身体、物財、情報の移動、流通の速さや量が増大したということではない。身体、物財、情報の移動、流通の速さと量という定量的な変動は、人びとの経験や感覚、そこで生み出される諸関係に、⁹⁾ある定性的な変化をもたらす。なぜなら、新たな交通・通信のネットワークがそれ以前の交通・通信とは異なる位置関係や経路をもつということが、社会的な行為や関係をそれまでとは異なる形態へと組み込んでいくからである。

具体的に説明しよう。

東京の前身である近世の江戸では、都市の内部の交通は町々を区切る木戸や、城へ向かう経路のあちこちに設けられた見附^{（みつけ）}や城門によって統制されていた。その結果、都市という場はその内部を移動する「速さ」だけでなく、そこでの人びとの身体や物財、情報の流通の経路もまた統制された場として組織されていた。江戸を中心とする国内外の交通・通信も、いわゆる「鎖国」政策や、街道と関所、参勤交代制や通行手形制度などによって、厳しい制御と統制の下に置かれていた。江戸という都市は、交通・通信の速度を一定の強度とベクトルをもつものとして制御し、統制し、構造化する「速度体制」に基礎づけられた場として存在していたのである。

明治期以降の交通・通信メディアの飛躍的な発展や多様化と、都市や国土へのそのようなメディアの組み込みは、近世社会における徒歩や帆船航行とは異なる多様な「速度」が、それまでの統制と制御を超えてさまざまな方向に向けて開かれていったこと、重層しつつ連繫する多様な速度を内包した新しい速度体制へとこの都市が組み込まれていったことを意味している。⁽¹⁰⁾そこでは、都市の内外を身体や物財、情報が、身分や目的のいかんを問わず「自由」に、かつてない速さで行き来することが可能になっただけではない。速度の変化は、人びとやその集団が一定の時間内に行為や関係を通じてリョウ有することができ空間の広がりを変化させる。速度の変化が鉄道のような特定のルートにそつてのみ生じる場合、社会と空間の関係のそうした変化は齊一に生じるのではなく、その沿線にだけ生じることになる。近世社会では不可能だった速度を導入し、そこで人びとの移動を制御・統制していた社会的な禁制や装置を解除していった近代は、その〈速度への解放〉を通じて新たな速度の落差や、特定の方向性をもった交通関係の構造を都市や国土の内部に生み出していった。交通・通信メディアが導入する速度をいわば媒介変数として、新しい速度体制のなかで人びとが行為し、関係を結ぶ広がりには不齊一な速さと方向性が導入されていたのである。かくして、『三四郎』のなかで九州の高校を卒業した青年三四郎が東京に向かう鉄道の車ソウを眺めながら、これから向かう東京での生活を夢想し、さらにその彼方に広がる新しい世界を夢見たように、そしてまた『東京の三十年』の田山花袋が、電車が敷設されたことで都市内部の繁華な場所に盛衰が生じ、学生や勤め人の住む「新開町」が都心近郊に開けていったことを三十年の時の推移にそつて回コして語るように、新たな速度体制は人びとの経験と想像力の地平に、それまでには存在しなかつた新たな行為や関係や想像力の地形——それを社会的な諸関係と諸意識を媒介として構成された、社会的世界の地形であるという意味で〈社会の地形〉と呼ぶことができる——を編成していった。そのような速度体制の国土的な中心であると同時に、それ自体がこの新しい速度体制を体现する場所であることが、明治期以降の東京の、社会の地形のなかでの実定性を支えつづけてきたのである。

都心のオフィス街、繁華街、その周辺の工業地区、巨大な後背地のように広がる住宅地区、政治的・経済的・文化的な「中心」としての東京と、それに対する「周縁」としての地方という国土の構造、他の先進資本主義諸国の大都市と同時に連関する「世界都市」という東京の位置づけなど、私たちが

(14)

のこととしてもはやそれに驚くことすらない、⁽¹⁵⁾「東京」という場を構成

する社会の地形の諸相はみな、明治期以降一世紀以上にわたる新たな速度体制の編成があつてはじめて可能になつたものなのだ。このとき、私たちが「都市」と呼び、「東京」と呼ぶ建造物や活動の地理的な広がり、それを支える速度体制——速度を媒介変数とする行為と関係の体制——の物質的な表出と、その表シ¹⁶⁾ョウなのである。

(若林幹夫『都市への／からの視線』による)

(注1) バブル景気——一九八〇年代後半から一九九〇年代前半にかけて起こった日本の好景気。

(注2) 田山花袋——明治から大正期にかけて活躍した小説家(一八七二—一九三〇)。

(注3) 見附——城の最も外側にあり、番兵が見張りをする場所。

問1 傍線番号(1)・(2)・(4)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び、マークしなさい。

16

18

(1) 遍在

16

- ① 形として現れ存在すること
- ② 内にひそんで存在すること
- ③ 広く行きわたり存在すること
- ④ 特定の場所だけに存在すること
- ⑤ 間にはさまって存在すること

(2) カオス

17

- ① 画期的な状態
- ② 混沌こんとんとした状態
- ③ 危険な状態
- ④ 秩序ある状態
- ⑤ 発展した状態

(4) 貪欲に

18

- ① あかす追い求めて
- ② 徹底的に意識して
- ③ あくまで正確に
- ④ 他者をおしのけて
- ⑤ ひたすら力まかせに

問2 空欄番号

(3)

(5)

(7)

マークしなさい。

19

に入る語の並びとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び

- ① 一方——だが——なぜなら
- ② だが——たとえば——なぜなら
- ③ また——確かに——たとえば
- ④ そして——だが——たとえば
- ⑤ だが——確かに——たとえば

問3

傍線番号(6)「東京という都市の過去と現在、そしておそらくは未来をも照らし出す概念」とあるが、どうということか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

20

- ① 「速度」や「スピード」という言葉は、東京の急速な変貌について八〇年代から九〇年代に限定して表すものではなく、明治期から今日に至るまでの長い時間軸のなかでインフラの発達度を計るものであるということ
- ② 「速度」や「スピード」という言葉は、明治維新後の近代都市としての東京の発展のみならず、メディアや情報ネットワークがより充実してゆく今後の東京の展望までも示唆するものであるということ
- ③ 「速度」や「スピード」という言葉は、東京の一時的な経済的成長だけを言い表したのではなく、明治維新以降の東京とそれ以前の東京との違いを比較する基準として最適なものであるということ
- ④ 「速度」や「スピード」という言葉は、バブル景気のなかで急速に様相を変えた東京を特徴づけるだけでなく、明治期から今日以降の東京のありようまでも言い表し得るものであるということ
- ⑤ 「速度」や「スピード」という言葉は、東京における情報の流通・消費の速さだけを言及したのではなく、東京が近代都市として休みなく発展し続けてきた事実を記録するためのものであるということ

問4 傍線番号(8)・(11)・(12)・(13)・(16)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

21
)
 25

(8)

驚タン

21

- ① 職人の技術にタン息する
- ② 濃タンを使い分けて描く
- ③ 物に動じない豪タンな人間
- ④ タン念に発表の調べ物をする
- ⑤ タン的に結論を述べる

(11)

リヨウ有

22

- ① 学生リヨウに寝泊まりする
- ② 地域の納リヨウ祭に出る
- ③ 会費を確かに受リヨウする
- ④ リヨウ縁を得て結ばれる
- ⑤ リヨウ犬を連れて森に出る

(12)

車ソウ

23

- ① ソウ厳な気配を感じる
- ② 彼と自分は同ソウ生だ
- ③ 鳥が樹上に営ソウする
- ④ 作物がソウ害を受ける
- ⑤ 事故でソウ傷を負った

(13)

回コ

24

- ① コ独な人生を送る
- ② コ線を描いた海岸沿い
- ③ コ客リストに目を通す
- ④ コ物商を営む近所の店
- ⑤ 自分の力をコ示する

(16)

表シヨウ

25

- ① 懸シヨウがかかった試合
- ② 社訓を暗シヨウする
- ③ シヨウ学金をもらう
- ④ ハトは平和のシヨウ徴だ
- ⑤ 能楽発シヨウの地へ行く

問5 傍線番号(9)「ある定性的な変化をもたらす」とあるが、どのようなことを言っているのか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

26

- ① 明治期以降、人の社会的なつながりが大きく広がりを見せたことよって、これまで以上に膨大な流通や速い移動手段が社会に求められるようになったこと
- ② 江戸時代は制度的に国外への交通や通信が制限されていたが、近代化によってそれらの禁制が解かれることで、情報の移動や流通の速度が増大したこと
- ③ 東京に市街鉄道が普及するだけでなく、全国各地に延びる交通メディアが加速度的に発達していったことで、人びとの空間的な移動が一気に広がったこと
- ④ 交通メディアだけでなく電信、電話など通信メディアの普及により、おもに利便性の面において人びとの生活に大きな変化をもたらされるようになったこと
- ⑤ 情報や流通の量、速度の増大化にともない、人びとが従来の制度的、空間的な制約から解放されることで、社会的な行為や関係性が多様化していったこと

問6 傍線番号(10)「そこ」の具体的内容として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

27

- ① 移動手段に乏しく、徒歩や帆船航行が主たる移動手段だった近世社会
- ② 十分な速度体制の整備がまだ国内の技術的に困難だった近世社会
- ③ 交通メディアや通信メディアが飛躍的に発展、多様化した近代社会
- ④ 身分にとらわれずに、人びとが自由に往来できるようになった近代社会
- ⑤ 鎖国が解かれ、異国の多様な人びとと交流するようになった近代社会

問7 空欄番号

(14)

に入る語として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

28

- ① 完全
- ② 秘密
- ③ 永遠
- ④ 自明
- ⑤ 均質

問8 傍線番号(15)「『東京』という場を構成する社会の地形の諸相はみな、明治期以降一世紀以上にわたる新たな速度体制の編成

があつてはじめて可能になった」とあるが、どういふことか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

29

- ① 新たな速度体制が編成されることによって、都心近郊に新たな魅力的な場が生まれ、それが東京という都市の発展を促す一因になっていたということ
- ② 新たな速度体制が編成されることによって、周縁に地方都市が生み出される一方、先進資本主義諸国に比肩する世界都市として東京が誕生したということ
- ③ 新たな速度体制が編成されることによって、これまでにはない自由な移動が可能になり、東京という大都市への流入が加速するようになったということ
- ④ 新たな速度体制が編成されることによって、東京が政治的、経済的、文化的に発展を遂げ、世界の資本主義諸国の大都市のなかに組み込まれたということ
- ⑤ 新たな速度体制が編成されることによって、社会的な枠組みのなかで新しい行為や関係、想像力が生まれ、東京という都市を形づくってきたということ

問9

筆者の考えや論の進め方を説明したものととして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

30

- ① 伊藤俊治の論考や八〇年代終わりに放送されたNHKの番組を引用することで、東京という都市と「速度」の関係に着目した自身の考えを補強している
- ② 夏目漱石の『三四郎』や田山花袋の『東京の三十年』の例を用いることで、東京という都市の発展が江戸時代同様に「速度」を重視してきたことを示している
- ③ 明治時代における交通メディアと通信メディアを分析し、それらが東京から距離のある遠隔地までは普及しなかったということを具体的に示している
- ④ 政治的、経済的、文化的な中心地として栄えた東京と、地方都市との間に歴然とした格差を生み出した国土の構造を、独自の観点から問題視している
- ⑤ 東京の前身となった江戸の都市の特徴について見附や城門などの例を挙げ、明治期以降にどのように継承されていったかについて詳しく分析している

下 書 き

下 書 き